

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	清水 紀枝
論文題目	院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰
審査要旨	<p>如意輪観音とは如意宝珠と宝輪という特殊な持物の力を象徴したほとけであるが、本論文は、経典や儀軌に反して持物をもたない二臂像であるにもかかわらず如意輪観音と呼称された石山寺本尊像、東大寺大仏脇侍像、四天王寺本尊像、広隆寺半跏思惟像などに着目し、こうした日本特有の如意輪観音の成立事情とその史的背景の解明を目指した成果である。その試みは結果的に、論文の表題にあるとおり院政期、特に後白河院の王権と真言密教との相依関係のありようを、如意輪観音を通して論ずるものとなっている。</p> <p>全体は序章につづく五つの章と付論一編で構成され、終章で今後の課題と展望が示されている。まず序章で研究の目的と全体の構成を概観した上で、第一章「日本における二臂如意輪観音像の成立について」では、施無畏・与願印を結び片脚を踏み下げた二臂像という、経軌には無い如意輪観音を取り上げている。これが淳祐をはじめとする醍醐寺僧の入寺を契機に石山寺で成立したことについては徳竹由明氏らの先行研究があるが、本論ではそれを出発点に、尊名の変更という特殊な事態が同形式の東大寺盧舎那大仏左脇侍像や岡寺本尊像に及んだ経緯について検討し、石山流を継ぐ真言僧が相次いで東大寺別当に就任していること、当該諸像を如意輪観音と記す『凶像抄』等の凶像集の編纂者もやはり淳祐の流れを汲むことを指摘する。</p> <p>第二章「半跏思惟形の如意輪観音像の成立と醍醐寺」では、前章のケースと並んで経軌にはみえない半跏思惟形二臂如意輪観音を軸としている。すなわち、四天王寺本尊をはじめとする聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されたことについて、その積極的な推進者の存在を想定し、聖徳太子・如意輪観音同体説や聖宝太子後身説を鍵にしながら、やはり覚性、守覚、心覚ら醍醐寺の法流による深い関与を浮彫にした。加えて、十三世紀後半から尊名が如意輪観音に変更された法隆寺聖霊院像や中宮寺本尊像について論を進め、叡尊の影響によるという新たな見解を提示している。</p> <p>第三章「醍醐寺をめぐる宝珠法の展開と如意輪観音信仰」では、如意輪観音の重要な持物である宝珠に着目し、阿部泰郎氏、内藤栄氏、上川通夫氏らの宝珠信仰や宝珠法に関する最新の研究成果を丹念に援用しながら関連の事象を拾い上げて、十世紀以降醍醐寺の周辺で宝珠への注目が高まり、特に十二世紀以降には醍醐寺において如意輪観音と宝珠の結びつきが重要な役割を果たしたこと、また院政期前後の多様な宝珠法の展開を主導したのが勝賢ら醍醐寺僧であり、彼らが諸寺院や宮中へ進出したのを背景として特に後白河院による如意輪観音への注目が高まったことを明らかにした。その過程で、『東長大事』中の密観宝珠と双龍の凶像に類似した摩尼宝珠曼荼羅を取り上げ、三宝院流の祈雨法との関係を推定している点などについては、いまだ検討の余地を残すものの、宝珠法と如意輪観音信仰が表裏あい連動するように隆盛した時代相をよく論述している。</p> <p>第四章「後白河院をめぐる如意輪観音の造像と信仰」は、ここまでの章で論じてきた二臂の如意輪観音に関わる人的ネットワークと後白河院との密接な関係を指摘し、半跏思惟形式の如意輪観音の成立に後白河院が関与した可能性について提起している。後白河院については一般に千手観音に対する信仰が知られるものの如意輪観音信仰については看過されてきた。尤も後白河院の崇仏ぶりは周知のことであり、如意輪観音への傾倒も十分肯けるところであるが、清水氏は特に四天王寺における聖徳</p>

太子信仰に鎮護国家、王法守護への期待があったことを論じた追塩千尋氏の近年の研究を踏まえて、十二世紀後半に聖徳太子ゆかりの寺院への新出をはかっていた真言宗の意図と、太子や如意輪観音の功德により王権を護持しようとした後白河院の思惑が一致して、半跏思惟形の如意輪観音像が成立したと考察している。

続く第五章「院政期真言密教をめぐる如意輪観音像の展開と王権」では、天皇の即位儀礼に際して修された御代始三壇法、および内裏仁寿殿における観音供に注目することで、天台と真言がそれぞれに皇室に接近する一つ的手段として如意輪観音信仰を用いた様子が具体的に明かされている。特に後者における夜居加持に定賢、勝覚ら醍醐寺僧が如意輪観音信仰を導入したありさまについては詳細に論じられており、院政期以降に如意輪観音が玉体護持、王権守護に関わる功德を期待されたことが説得力をもって示されている。

また、こうした仏教と世俗権との相依関係が強まるなかで、王権護持の動向のひとつとして後白河院政期の小塔供養があることを論じた付論を以て、第五章を側面から補強している。

「今後の課題と展望」と題した結章においては、如意輪観音像をめぐる日本独自の展開について、萌芽期（十世紀頃）、発展期（十世紀末～十二世紀後半頃）、継承期（十三世紀以降）と三つの段階に分期し、それぞれの歴史的な位置付けを明快に提示することで総括としている。

九世紀初に空海によってもたらされた如意輪観音は、やがて真言密教の枠を超えて我が国の風土に根付き、近世に至るまで広汎な信仰を獲得しつつ展開してきた。このほとけがとりわけ天皇や上皇と密接に結びついたことはかねてより注意されてきたが、これまで包括的な研究はほとんどなされておらず、井上一稔氏による啓蒙的な概説書を挙げ得るにとどまっている。

本論文は、そうした如意輪観音研究に本格的に取り組む第一歩たるべく、歴史学、仏教史、思想史、文学など関連諸学の新しい成果を精力的に博捜し、それらを最大限に咀嚼、援用することで新たな視点を示しつつ明快かつ簡潔に論述されている。全体に、提示された見解がきわめて妥当性のあるものであるだけに、もう一段掘り下げた論の展開が欲しかったところであり、特に前半の第一章、第二章においては考証を深化させずに関係者たちのネットワークを抽出していく手法に始終したきらいがある。また、院政期における如上の動向は、ひとり如意輪観音に限るものではなく他の尊像にもある程度通有のものだったと思われ、その中で如意輪観音像に特有に、ないしは顕著にあらわれた事象や性格をどのように析出していくかについては、なお工夫を要するところであろう。このように今後深めてゆくべき課題も残るが、審査委員会では以上のような成果に鑑みて、本論文が博士学位に値するものとの結論を得た。

公開審査会開催日	2012年 1月 30日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学 文学学術院 ・ 教授	博士(文学)	肥田 路美
審査委員	早稲田大学 文学学術院 ・ 教授	博士(文学)	大橋 一章
審査委員	早稲田大学 文学学術院 ・ 准教授	博士(文学)	内田 啓一
審査委員	日本女子大学 文学部史学科 ・ 教授	博士(文学)	永村 眞
審査委員			